

# 大つごもり

樋口一葉

青空文庫



## 上

井戸は車にて綱の長さ十二尋ひろ、勝手は北向きにて師走しはすの空のか  
 ら風ひゆうひゆうと吹ぬきの寒さ、おお堪えがたと竈かまどの前に火な  
 ぶりの一分ぶんは一時じにのびて、割木ほどの事も大台にして叱しかりとは  
 さるる婢女はしたの身つらや、はじめ受宿うけやどの老嫗おばさまが言葉には御子  
 様がたは男女なんによ六人、なれども常住うち家内にお出いであそばすは御総領  
 と末お二人、少し御新造ごしんぞは機嫌かいなれど、目色かほいろ顔色かほいろを呑みこ  
 んでしまへば大した事もなく、結句おだてに乗る質たちなれば、御前おまへ  
 の出様一つで半襟はんゑり半がけ前垂まへだれの紐ひもにも事は欠くまじ、御身代

は町内第一にて、その代り吝しほき事も二とは下さがらねど、よき事には  
大おほ旦那だんなが甘い方ほうゆゑ、少しのほまちは無なき事も有あるまじ、厭いとや  
に成なつたら私の所ところまで端書はがき一枚、こまかき事は入いらず、他所よその口  
を探せとならば足は惜おぼしまじ、何いづれ奉公の秘伝は裏表と言ふて聞  
かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つ  
で又この人のお世話には成なるまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣  
に入らぬ事も無なき筈はずと定めて、かかる鬼しゆうの主をも持つぞかし、目  
見えの済すみて三日のちの後、七歳ななつになる嬢さま踊りのさらひに午後よ  
りとある、その支度は朝湯にみがき上げてと霜氷る暁、あたたか  
き寢床うちの中より御新造灰吹きをたたきて、これこれと、此これ詞ことばが目  
覚しの時計より胸にひびきて、三言とは呼ばれもせず帯より先に

襷たすきがけの甲斐かひ々々しく、井戸端いづに出れば月かげ流しに残りて、肌はだへ  
 を刺すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据すゑ風呂ふるにて大きから  
 ねど、二つの手桶てをけに溢あふるるほど汲くみて、十三は入れねば成らず、  
 大汗あせに成りて運びけるうち、輪宝りんぼうのすがりし曲ゆがみ齒はの水みづばき下げ  
 駄た、前鼻緒まへなすのゆるゆるに成りて、指を浮かさねば他愛たわいの無きやう  
 成なりし、その下駄しただにて重き物を持ちたれば足もと覚おぼ束つかなくて流し  
 元の氷にすべり、あれと言ふ間もなく横にころべば井戸がはにて  
 向むかふ臆おそしたたかに打ちて、可愛かわいや雪はづかしき膚はだに紫の生々しく  
 なりぬ、手桶てぶくをも其処そこに投なげ出して一つは満足成しが一つは底ぬ  
 けに成りけり、此桶これの価あたゑゑにほどか知らねど、身代たこれが為ためにつ  
 ぶれるかの様に御新造おんしんぞうの額ひたへぎ際はに青筋おそろしく、朝飯あさはんのお

給仕より睨にらまれて、その日一日物も仰おほせられず、一日おいてよりは箸はしの上げ下おろしに、この家の品は無た代では出来ぬ、主しゆうの物とて粗末ごに思ふたら罰ばちが当るぞえと明け暮れの談義、来る人毎ごとに告げられて若き心には恥かしく、その後は物ごとごに念を入れて、遂つひに麁想そさうをせぬやうに成りぬ、世間に下女つかふ人も多けれど、山村やまむ村らほど下女の替る家は有るまじ、月に二人は平常つねの事、三日四日に帰りしもあれば一夜居て逃にげいでもあらん、開かい闢びやく以来を尋ねたらば折る指にあの内儀かみさまが袖口そでぐちおもはるる、思へばお峯みねは辛棒むごもの、あれに酷むごく当たらば天罰てんばつたちどころに、この後ごは東京広しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なものの、美事みごとの心がけと賞ほめるもあれば、第一容貌きりようが申分なした

と、男は直じきにこれを言ひけり。

秋より只ただ一人の伯父わづらが煩わづらひて、商売の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居ずまゐに成しよしは聞けど、むづかししゅうき主しゅうを持つ身の給金を先きに貰もらへばこの身は売りたるも同じ事、見舞にと言ふ事も成らねば心ならねど、お使ひ先の一寸すんの間とても時計を目当にして幾足幾町とそのしらべの苦るしさ、馳はせ抜けてもとは思へど悪事千里といへば折角の辛棒むだを水泡むだにして、お暇いとまともならば弥いよいよ々病人の伯父に心配をかけ、瘦やせ世帯ぜたいに一日の厄介やくがいも気の毒なり、その内にはと手紙ばかりを遣やりて、身は此ここ処こに心ならずも日を送りける。師走の月は世間一いつたい躰物たいぶつせわしき中を、こそれと更に選らみて綾羅きらをかざり、一昨日おととひ日出そろひしと聞く某それの芝居、

狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十五日、珍らしく家内中との触れに成けり、このお供を嬉しがるは平常のこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違ひたらばそれまでとして遊びの代りのお暇を願ひしにさすがは日頃の勤めぶりもあり、一日すぎての次の日、早く行きて早く帰れと、さりとは気ままの仰せに有難うぞんじますと言ひしは覚えで、頓ては車の上に小石川はまだかまだかと鈍かしがりぬ。

初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、正直安兵衛とて神はこの頭に宿り給ふべき大薬罐の額ぎはぴかぴかとして、これを目印に田町より菊坂あたりへかけて、茄子



大根だいこんの御用をもつとめける、薄元手を折かへすなれば、折から直ね  
 の安やすうて嵩かさのある物より外ほかは棹さほなき舟に乗合の胡瓜きゅうり、苞つとに松茸まつたけ  
 の初物などは持たで、八百安が物は何時いつも帳面につけた様など笑  
 はるれど、愛顧ひいきは有がたきもの、曲りなりにも親子三人の口をぬ  
 らして、三之助とて八歳やつになるを五厘ごりん学校に通はするほどの義務つとめ  
 もしけれど、世の秋つらし九月の末、俄にはかに風が身にしむといふ  
 朝あさ、神田かんだに買出しの荷を我が家までかつぎ入れるとそのまま、発ほ  
 熱つねつにつづいて骨病みの出いでしやら、三月ごしの今日まで商ひは更  
 なる事、段々に喰べへらして天てん秤びんまで売る仕義になれば、表おもて  
 店だなの活計くわしたちがたく、月五十銭の裏屋に人目の恥いとを厭いとふべき身  
 ならず、又時節が有らばとて引越しも無惨むざんや車に乗するは病人びやうじんば

かり、片手に足らぬ荷をからげて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峯  
 は車より下りて 処そこ此処と尋ぬるうち、凧紙風船などを軒につる  
 して、子供を集めたる駄菓子やの門かどに、もし三之助の交じりてか  
 と覗のぞけど、影も見えぬに落胆がっかりして思はず往來ゆききを見れば、我が居  
 るよりは向ひのがはを瘦やせぎすの子供が 薬瓶くすりびんもちて行く後姿、  
 三之助よりは丈たけも高く余り瘦せたる子と思へど、様子の似たるに  
 つかつかと駆け寄りて顔をのぞけば、やあ姉ねえさん、あれ三ちゃん  
 で有ったか、さても好い処ところでと伴なはれて行くに、酒やと芋やの  
 奥深く、溝板どぶいたがたがたと薄くらき裏に入れば、三之助は先へ駆  
 けて、父ととさん、母かかさん、姉さんを連れて帰つたと門かど口より呼び  
 立てぬ。

何お峯が来たかと安兵衛が起上れば、女房つまは内職の仕立物に余  
 念なかりし手をやめて、まあまあこれは珍らしいと手を取らぬば  
 かりに喜ばれ、見れば六畳一間けんに一間の戸棚けん只一つ、箆たんす筒長持は  
 もとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかげも無く、今戸焼  
 の四角なるを同じ形なりの箱に入れて、これがそもそもこの家いへの道具  
 らしき物、聞けば米櫃こめびつも無きよし、さりとは悲しき成ゆき、師  
 走の空に芝居みる人も有るをとお峯はまづ涙ぐまれて、まづまづ  
 風の寒きに寝てお出いでなされませ、と堅焼かたやきに似し薄蒲団うすぶとんを伯父  
 の肩どこに着せて、さぞさぞ沢山たんの御苦勞なさりましたる、伯母様も  
 何処どこやら瘦せが見えまする、心配のあまり煩ふて下さりますな、  
 それでも日増しに快よい方で御座んすか、手紙で様子は聞けど見ね

ば気にかかりて、今日のお暇いとまを待ちに待つて漸やっとの事、何家うちなどはどうでも宜よござります、伯父様御全快おもてにならば表店おもてに出るも訳なき事なれば、一日も早く快よく成つて下され、伯父様に何ぞと存じたれど、道は遠し心は急せく、車夫くるまやの足が何時より遅いやうに思はれて、御好物の飴屋あめやが軒も見はぐりました、此金これは少々なれど私が小遣の残り、麴かうちまち町の御親類よりお客の有し時、その御隠居すばくさま寸白のお起りなされてお苦しみの有しに、夜を徹とほしてお腰をもみたれば、前垂でも買へとて下された、それや、これや、お家は堅うちかたけれど他処よそよりのお方が鼻負ひいきになされて、伯父さま喜んで下され、勤めにくくも御座んせぬ、この巾きんちやく着も半襟もみな頂き物、襟は質素じみなれば伯母さま懸けて下され、巾着は少し形なりを

換へて三之助がお弁当の袋に丁度宜よいやら、それでも学校へは行ゆき  
 ますか、お清書が有らば姉にも見せてとそれからそれへ言ふ事長  
 し。七歳ななつのとしに父てておや親得意場の蔵普請くらふしんに、足場を昇りて中なかぬ  
 りの泥鰻こてを持ちながら、下なる奴やつこに物いひつけんと振向く途端、  
 曆に黒ぼしの仏滅とでも言ふ日で有しか、年来馴なれたる足場をあ  
 やまりて、落たるも落たるも下は敷石に模様がへの処ありて、掘  
 おこして積みたてたる切角きりかどに頭脳したたか打ちつけたれば甲斐かひ  
 なし、哀れ四十二の前まへ厄やくと人々のち後に恐ろしがりぬ、母は安兵衛  
 が同胞けうだいなれば此処こゝに引取られて、これも二年のちの後はやり風俄か  
 に重く成りて亡うせられたれば、後のちは安兵衛夫婦を親として、十八の今  
 日まで恩はいふに及ばず、姉さんと呼ぶるれば三之助は弟おととのやう

に可愛く、此処へ此処へと呼んで背を撫で顔を覗いて、さぞ父さんが病気で淋しく愁らかる、お正月も直きに来れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母さんに無理をいふて困らせては成りませぬと教ゆれば、困らせる処か、お峯聞いてくれ、歳は八つなれど身躰も大きし力もある、我が寐てからは稼ぎ人なしの費用は重なる、四苦八苦見かねたやら、表の塩物やが野郎と一処に、蜆を買ひ出しては足の及ぶだけ担ぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商ひは必ずある、一つは天道さまが奴の孝行を見徹してか、となりかくなり薬代は三が働き、お峯ほめて遣つてくれとて、父は蒲団をかぶりて涙に声をしぼりぬ。学校は好きにも好きにも遂ひに世話をやかしたる事なく、朝めし喰べると馳け出して三時の退校に道草

のいたづらした事なく、自慢では無けれど先生さまにも褒め物の  
 子を、貧乏なればこそ蛭を担がせて、この寒空に小さな足に草鞋  
 をはかせる親心、察して下されとて伯母も涙なり。お峯は三之助  
 を抱きしめて、さてもさても世間に無類の孝行、大がらとても八  
 歳は八歳、天秤肩にして痛みはせぬか、足に草鞋くひは出来ぬ  
 かや、堪忍して下され、今日よりは私も家に帰りに伯父様の介  
 抱活計の助けもしまする、知らぬ事とて今朝までも釣瓶の氷  
 を愁らがつたは勿躰ない、学校ざかりの年に蛭を担がせて姉が  
 長い着物きてゐらりようか、伯父さま暇を取つて下され、私は最  
 早奉公はよしまするとて取乱して泣きぬ。三之助はをとなしく、  
 ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじとうつ向きたる肩のあた

り、針目あらはに衣きぬ破れて、此これ肩に担ぐか見る目も愁つらし、安兵衛はお峯が暇を取らんと言ふにそれは以ての外ほか、志しは嬉しけれど歸りてからが女の働き、そののみか御主人へは給金の前借もあり、それツ、と言ふて歸られる物では無し、初うい奉公が肝腎かんじん、辛棒がならで戻つたと思はれても成らねば、お主しゆう大事に勤めてくれ、我が病やまひ氣も長くは有るまじ、少しよくば氣の張弓、引つづいて商ことしひもなる道理、ああ今半月の今歳ことしが過れば新年はるは好き事よも来たるべし、何事も辛棒々々、三之助も辛棒してくれ、お峯も辛棒してくれとて涙を納めぬ。珍らしき客に馳走は出来ねど好物の今川焼、里芋の煮ころがしなど、沢山たべろよと言ふ言葉が嬉し、苦勞はかけまじと思へど見す見す大晦おほみそ日に迫りたる家の難義、胸つかに痞



への病は癩しやくにあらねどそもそも床に就きたる時、田町の高利かしより三月しばりとて十円かりし、一円五拾銭は天利とて手に入りしは八円半、九月の末よりなればこの月はどうしても約束の期限なれど、この中にて何となるべきぞ、額を合せて談合の妻は人仕事に指先より血を出して日に拾銭じつせんの稼いぎも成らず、三之助に聞かするとも甲斐なし、お峯が主は白金しゆうかう しろかねの台町だいまちに貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅じやうきら美々しく、我れ一度お峯への用事ありて門かどまで行きしが、千両にては出来まじき土蔵の普請、羨うらやましき富貴と見たりし、その主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を聞かぬとは申されまじ、この月末に書かかへを泣きつきて、をどりの一両二分を此処に払へば又三月の延期のべに

はなる、かくいはば欲に似たれど、大道餅買ふてなり三ヶ日の雑煮に箸を持せずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日みそかまでに金二両、言ひにくく共この才覚たのみたきよしを言ひ出しけるに、お峯しばらく思案して、よろしう御座んす慥たしかに受合ひました、むづかしくはお給金の前借にしてなり願ひまじよ、見る目と家内うちとは違ひて何処いづこにも金銭の埒らちは明きにくけれど、多くでは無しそれだけで此処の始末がつかねば、理由わけを聞いて厭やは仰せらるまじ、それにつけても首尾そこなうては成らねば、今日は私は帰ります、又の宿下りは春永はるなが、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて此金これを受合ける。金は何として越おこす、三之助を貰ひにやるかとあれば、ほんにそれで御座んす、常日つねさへある

に大晦日といふては私の身に隙すきはあるまじ、道の遠かきに可憐わいさうなれど三ちゃんを頼みます、昼前のうちに必らず必らず支度はして置まするとて、首尾よく受合ひてお峯は帰りぬ。

## 下

石いし之助のすけとて山村の総領息子、母の違ふに父て親おやの愛も薄く、これを養子いだに出して家督あとは妹いもと娘むすめの中なかにとの相談、十年の昔しより耳はきに挟はさみて面白からず、今の世に勘当のならぬこそをかしけれ、思ひのままに遊びて母が泣きをと父て親おやの事は忘れて、十五の春より不ふり了よう簡けんをはじめぬ、男をとこ振ぶりにがみありて利発らしき

眼まなざし、色は黒けれど好き様子ふうとて四隣あたりの娘どもが風説うわさも聞えけ  
 れど、唯ただ乱暴いちづつ一途に品川へも足は向くれど騒さわぎはその座まぎり、夜よ  
なか中に車を飛ばして車くるま町の破落戸ろがもとをたたき起し、それ酒  
さかなかへ肴と、紙入れの底をはたきて無理を徹とほすが道楽なりけり、到と  
ても底これに相続は石油蔵へ火を入れるやうな物、身代けふ烟りと成りて  
 消え残る我等何とせん、あとの兄弟ふびんも不憫と母親、父に讒ざんげん言の  
 絶間なく、さりとして此放蕩れ子を養子にと申受うく人この世にはある  
 まじ、とかくは有金の何ほどを分けて、若隠居の別戸籍にと内々  
 の相談は極きまりたれど、本人うわの空に聞流して手に乗らず、分  
 配金は一万、隠居扶持ぶち月々おこして、遊興あそびに関を据へず、父上な  
 くなれば親代りの我れ、兄上と捧さげて竈かまどの神の松一本も我が託宣

を聞く心ならば、いかにもいかにも別戸の御主人に成りて、この家の為には働かぬが勝手、それ宜しくば仰せの通りに成りまじよと、どうでも嫌やがらせを言ひて困らせける。去歳にくらべて長屋もふふたり、所得は倍にと世間の口より我が家の様子を知りて、をかしやをかしや、そのやうに延ばして誰が物にする氣ぞ、火事は燈明皿よりも出る物ぞかし、総領と名のる火の玉がころがるとは知らぬか、やがて巻きあげて貴様たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を当てに大呑みの場処もさだめぬ。

それ兄様のお帰りと言へば、妹ども怕がりて腫れ物のやうに障るものなく、何事も言ふなりの通るに一段と我がままをつのら

して、炬燵こたつに両足、酔よひぎめの水を水をと狼藉ろうぜきはこれに止めをさしぬ、憎くしと思へどさすがに義理は愁つらき物かや、母親かげの毒舌をかくして風引かぬやうに小抱こかいまき巻何くれと枕まくらまで宛あてがひて、  
あす明日の支度のむしり田作ごまめ、人手にかけては粗末になる物と聞えよ  
がしの経済を枕もとに見しらせぬ。正午ひるも近づけばお峯は伯父への約束  
こころもと無く、御新造ごしんぞが御機嫌を見はからふに暇いとまも無ければ、  
僅わづかの手すきに頭つむりの手拭てぬぐひを丸まるめて、このほどより願ひ  
ましたる事、折からお忙がしき時心なきやうなれど、今日の昼る  
過ぎにと先方さきへ約束のきびしき金とやら、お助けの願はれますれば  
伯父の仕合せ私の喜び、いついつまでも御恩に着つまするとて手  
をすりて頼みける、最初はじめいひ出いでし時にやふやながら結局つまりは宜よしと

有し言葉を頼みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅うるさくいひては却かへりて如何いかがと今日までも我慢しけれど、約束は今日と言ふ大晦日おほみそかのひる前、忘れてか何とも仰せの無き心もとなき、我れには身に迫りし大事と言ひにくきを我慢してかくと申ける、御新造は驚きたるやうの惘あきれ顔して、それはまあ何の事やら、なるほどお前が伯父さんの病氣、つづいて借金の話しも聞きましたが、今が今私わたの宅うちから立換へようとは言はなかつた筈はず、それはお前が何ぞの間違へ、私は毛頭すこしも覚えの無き事と、これがこの人の十八番とはてもさても情なし。

花紅葉はなもみぢうるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟ゑりをそろへて褻つまを重ねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪魔ものの兄が見

る目うるさし、早く出てゆけ疾く去ねと思ふ思ひは口にこそ出さ  
 ね、もち前の 疖かんしやく癩やくしたに堪えがたく、智識の坊さまが目たに御  
 覧じたらば、炎につつまれて身は黒くろけふ烟けふりに心は狂乱の折ふし、  
 言ふ事もいふ事、金は敵てきやく薬ぞかし、現在うけ合ひしは我れに覚  
 えあれど何のそれを厭いとふ事かは、大方お前が聞ちがへと立たてきりて、  
 烟草たばこ輪こにふき私は知らぬと済しけり。

ゑゑ大金でもある事か、金なら二円、しかも口づから承知して  
 置きながら十日とたたぬに耄もうろくはなさるまじ、あれあの懸すずりけ硯  
 の引出しにも、これは手つかずの分ぶんと一ト束、十か二十か悉みな皆と  
 は言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑ゑがほ顔、三之助に雑煮のはし  
 も取らさると言はれしを思ふにも、どうでも欲しきはあの金ぞ、



恨めしきは御新造とお峯は口惜くちをしさに物も言はれず、常々をとなしき身は理屈すべづめにやり込すべる術もなく、すぐすと勝手に立てば正午の号砲どんの音たかく、かかる折ふし殊ことさら更胸さらにひびくものなり。

お母ははさまに直様すぐさまお出下しさるやう、今朝けさよりのお苦るしみに、

潮時は午後、初産ういざんなれば旦那とり止めなくお騒さわぎなされて、お

老としより人なき家なれば混雑お話しにならず、今が今お出でをとて、

生しょうし死しの分目わけめといふ初産に、西応寺さいおうじの娘がもとより迎ひの車、

これは大晦日とて遠慮のならぬ物なり、家のうちには金もあり、

放蕩のらどのが寝ねてはいる、心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重

きに引かれて、車には乗りけれど、かかる時気樂おつとの良人が心根に

くく、今日あたり沖釣りでも無き物をと、太公望たいこうぼうがはり合ひなき人をつくづくと恨みて御新造いでられぬ。

行ゆきちがへに三之助、此処と聞きたる白しろ金かね台だい町まち、相違なく尋

ねあてて、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕こわ々ごわのぞけば、誰たれぞ来しかと竈かまどの前に泣き伏したるお

峯が、涙をかくして見出みいだせばこの子、おお宜く来たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉あねさま這入はいつても叱しかられはしませぬか、約束

の物は貰つて行ゆかれますか、旦那や御新造に宜くお礼を申て来いと父ととさんが言ひましたと、子細を知らねば喜び顔つらや、まづま

づ待つて下され、少し用もあればと馳はせ行ゆきて内外うちとを見廻せば、

嬢さまがたは庭に出て追羽子に余念なく、小僧どのはまだお使ひ

より帰らず、お針は二階にてしかも聾つんぼなれば子細なし、若旦那  
と見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中まつただなか、拝みまする神さま  
さま、私は悪人になります、成りたうは無けれど成らねば成り  
ませぬ、罰ばちをお当てなさらば私一人わたし、遣つかふても伯父や伯母は知ら  
ぬ事なればお免ゆるしなさりませ、勿躰もつたいなけれどこの金ぬすませて  
下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、  
つかみし後のちは夢とも現うつとも知らず、三之助に渡して歸したる始終  
を、見し人なしと思へるは愚かや。

.....

その日も暮れ近く旦那つりより恵あま比須びすがほして歸らるれば、御  
新造も続いて、安産の喜びに送りの車夫まのにまで愛想よく、今宵こよひを

仕舞へば又見舞ひまする、明日は早くに妹共の誰れなりとも、一人は必らず手伝はすると言ふて下され、さてさて御苦労と蠟燭ろうそく代だいなどを遣やりて、やれ忙がしや誰れぞ暇な身からだを片身かりたき物、お峯小松菜はゆでて置いたか、数の子は洗つたか、大旦那はお歸りに成つたか、若旦那はと、これは小声に、まだと聞いて額しほに皺しほを寄せぬ。

石之助その夜はをとなく、新年は明日よりの三ケ日なりとも、我が家にて祝ふべき筈ながら御存じの締りなし、堅くるしき袴はかまづれに挨あいさつ拶も面倒、意見も実は聞あきたり、親類の顔に美しくきも無ければ見たしと思ふ念もなく、裏屋の友達がもとに今宵約束も御座れば、一先まづお暇いとまとして何れいづ春永に頂ちやうだい戴だいの数々は願ひま

する、折からお目出度<sup>めでたき</sup>矢先、お歳暮には何ほど下さりますかと、  
 朝より寝込みて父の歸りを待ちしは此金<sup>これ</sup>なり、子は三界の首<sup>くび</sup>械<sup>かせ</sup>  
 といへど、まこと放蕩<sup>のら</sup>を子に持つ親ばかり不幸なるは無し、切ら  
 れぬ縁の血筋といへば有るほどの悪<sup>いたづら</sup>戯<sup>わら</sup>を尽して瓦<sup>ぐわ</sup>解<sup>かい</sup>の曉に落  
 こむはこの淵<sup>ふち</sup>、知らぬと言ひても世間のゆるさねば、家の名をし  
 く我が顔はづかしきに惜しき倉庫<sup>くら</sup>をも開くぞかし、それを見込み  
 て石之助、今宵を期限の借金が御座る、人の受けに立ちて判を為<sup>し</sup>  
 たるもあれば、花見のむしろに狂風一陣、破落戸<sup>ごろつき</sup>仲間に遣る物を  
 遣らねばこの納まりむづかしく、我れは詮<sup>せん</sup>方<sup>かた</sup>なければどお名前に  
 申わけなしなどと、つまりは此金<sup>これ</sup>の欲しと聞えぬ。母は大方かか  
 る事と今朝<sup>けさ</sup>よりの懸念<sup>けねん</sup>うたがひなく、幾金<sup>いくら</sup>とねだるか、ぬるき旦

那どのの処置はがゆしと思へど、我れも口にては勝がたき石之助  
 の弁に、お峯を泣かせし今朝とは変りて父が顔色いかにとばかり、  
 折々見やる尻目しりめおそろし、父は静かに金庫の間へ立ちしが頓やがて五  
 十円束一つ持ち来て、これは貴様に遣るではなし、まだ縁づかぬ  
 妹どもが不憫ふびん、姉が良人おつとの顔にもかかる、この山村は代々堅氣一  
 方に正直律義を真向まつかうにして、悪い風説うわさを立てられた事も無き筈  
 を、天魔の生れがはりか貴様といふ悪者わるの出来て、無き余りの無  
 分別に人の懐ふところでも覗ねらうやうにならば、恥は我が一代にとどまらず、  
 重しといふとも身代は二の次、親兄弟に恥を見するな、貴様にい  
 ふとも甲斐かひは無けれど尋常なみなみならば山村の若旦那とて、入いらぬ世  
 間に悪評もうけず、我が代りの年礼に少しの労をも助くる筈を、

六十に近き親に泣きを見ずるは罰あたりで無きか、子供の時には本の少しものぞいた奴、何故なぜこれが分りをらぬ、さあ行け、帰れ、何処へでも帰れ、この家に恥は見するなとて父は奥深く這入りて、金は石之助が懐ふところ中に入りぬ。

.....

お母様御機嫌よう好い新年をお迎ひなされませ、左様ならば参りますと、暇いとまごひ乞こひわざとうやうやしく、お峯下駄を直せ、お玄関からお帰りでは無いお出かけだぞとづぶづぶ分々々しく大手を振りて、行先は何処いづこ、父が涕なみだは一夜よの騒さわぎに夢とやならん、持つまじきは放蕩のら息子、持つまじきは放蕩のらを仕立したつる継母まははぞかし。塩花こそふらぬ跡は一まづ掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけ

れど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、どうすればあのやうに凶太くなられるか、あの子を生んだ母かかさんの顔が見たい、と御新造例に依よつて毒舌をみがきぬ。お峯はこの出来事も何として耳に入るいべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻さつきの仕業はと今更夢路を辿たどりて、おもへばこの事あらはれずして済むべきや、万が中なかなる一枚とても数ふれば目の前なるを、願ひの高に相応いんずの員数手近の処いづこになく成しとあらば、我れにしても疑ひは何処いづこに向くべき、調べられなば何とせん、何といはん、言ひ抜けんは罪深し、白状せば伯父が上にもかかる、我が罪は覚悟の上なれど物がたき伯父様にまで濡ぬれ衣ぎぬを着せて、干ほされぬは貧乏のならひ、かかる事もする物と人の言ひはせぬか、悲しや何としたら



よかる、伯父様に疵きずのつかぬやう、我身が頓死とんしする法は無きかと

目は御新造が起居たちみにしたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

おほかんちやう

大勘定とてこの夜よあるほどの金をまとめて封印の事あり、

御新造それそれと思ひ出して、懸け硯に先程、屋根やの太郎に貸付のもどり彼金あれが二十御座りました、お筆お峯、かけ硯を此処へと奥の間より呼ばれて、最早この時わが命は無き物、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申、御新造が無情そのままに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、欲かしらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様同腹ひとつで無きだけを何処までも陳のべて、聞かれずば甲斐なしその場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘うそとは思しめすまじ、それほど度

胸すわれど奥の間へ行く心は屠処としよの羊なり。

.....

お峯が引出したるは唯二枚、残りは十八あるべき筈を、いかにしけん束のまま見えずとて底をかへして振へども甲斐なし、怪しきは落散し紙切れにいつ認めしたたしか受取一通。

(引出しの分も拝借致し候

石之助)

さては放蕩のらかと人々顔を見合せてお峯が詮議せんぎは無かりき、孝の余徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いやいや知りて序ついでに冠かぶりし罪かも知れず、さらば石之助はお峯が守り本尊なるべし、後のちの事しりたや。





# 青空文庫情報

底本：「にぎりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2008（平成20）年6月10日128刷

初出：「文学界」

1894（明治27）年12月号

※底本巻末の编者による語注は省略しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※このファイルには、以下の青空文庫のテキストを、上記底本に  
そつて修正し、組み入れました。

「大つごもり」（入力：青空文庫、校正：米田進、小林繁雄）  
入力：酔いどれ狸

校正：Juki

2015年2月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 大つごもり

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>